

Costume and Textile

No.23

服飾文化学会会報

2012年3月

2012（平成24）年度 第13回服飾文化学会総会・大会のお知らせ

会員の皆様へは既にお知らせをお送りしましたように、2012（平成24）年度 第13回総会・大会を下記のように開催いたします。多くの皆様ご参加下さいますようご案内申し上げます。

開催日 2012年5月19日（土）・20日（日）

開催校 しょうがい 尚絅学院大学

〒981-1295宮城県名取市ゆりが丘4-10-1

【研究発表】 5 F 講義室

【展 示】 グループトレーニング室

【見学会】

大学施設「エラ・オー・パトリックホーム」をご覧ください。

本学はアメリカの女性宣教師により1892年に創設され、「エラ・オー・パトリックホーム」は創建時の学院本館で、これまでの歴史を現在に伝える遺産です。2010年に名取キャンパスに移築復元しました。

仙台近隣の見学施設については、特に学会として揃っての見学会は致しません。各種情報をご案内します。

1. プログラム

5月19日（土）

13：30～15：30 研究発表

15：40～17：10 特別講演

演題「京派と海派—チャイナドレスの近代史」

講師 謝 黎（シャ・レイ）氏

（東北芸術工科大学専任講師）

17：20～17：50 総会

19：00～20：30 懇親会

（江陽グランドホテル

仙台市青葉区本町2-3-1）

5月20日（日）

9：30～11：30 研究発表

11：30～12：30 ポスター・展示スピーチ

12：30～13：30 昼食 および

エラ・オー・パトリックホーム見学

13：30～14：30 ポスター・展示の説明・質疑

（※展示は、5/19-13：30～5/20-14：30

※本年度よりポスター・展示ショートスピーチを研究発表会場で事前説明して頂きます。詳細は送付します。）

2. 参加費

大会参加費	会員	3,000円
	非会員	4,000円
	学生会員	1,000円
	学生非会員	1,500円
懇親会費	会員	6,000円
	非会員	6,500円
	学生会員	2,500円
	学生非会員	3,000円
昼食代(5/20)		1,050円

3. 発表・参加申込

（1）発表申込締め切り日 2012年3月31日（土）

①既にお送りした「発表者へのお知らせ」

（2種）の申込用紙を、第13回総会・大会

実行委員 玉田真紀まで郵送、または内容をメールでご連絡下さい。(必着)

②発表形式には、口頭発表・ポスター展示・作品展示の3種があります。

③発表は未発表の研究報告で、発表者は共同発表者とも本会会員に限られていますので、非会員の発表希望者は学会ホームページから入会手続きをお願い致します。

(2) 要旨原稿締め切り日 2012年5月1日(火)

(提出先: tamada@shokei.ac.jp)

①用紙: A4縦置き、横書、1枚

②余白: 上25mm、下30mm、左右30mm

③文字: 10.5ポイント、明朝体

(3) 参加申込・払込締め切り日

2012年5月1日(火)

ゆうちょ銀行口座: 店番818 普通3529486

加入者名: 玉田真紀 (タマダマキ)

4. 特別講演について

◆謝 黎 (シャ・レイ) 氏 講演要旨

「京派と海派—チャイナドレスの近代史」

清王朝の「伝統」と上海モダン。チャイナドレスにまつわるトピックを「京派」と「海派」という二つの文化圏で解説する。ファッション・女性・伝統・モダン・民族といったキーワードを通じて、チャイナドレスの民族服・流行服・伝統服のあり方を紹介し、服飾文化から近代中国の一側面を読み取る。講演と共に、コレクションのチャイナドレスの現物を2～3点紹介する。

◆講師のプロフィール

上海出身。昭和女子大学大学院生活機構研究科修了、学術博士。2010年より東北芸術工科大学芸術学部歴史遺産学科専任講師。東北文化研究センター研究員。専攻は服飾人類学。学生時代からアジアの布に魅かれ、チャイナ服の研究と収集を始める。定期的に博物館や美術館、ギャラリーでコレクションの展示企画を開催し、その魅力を多くの方々に紹介している。著書に『チャイナドレスをまとう女性たち—旗袍にみる中国の近・現代』(青弓社、2004)、『チャイナドレスの文化史』(青

弓社、2011)がある。

5. アクセス

① JR仙台駅からバス利用の場合

仙台駅西口バスプール8番から約40分(宮城交通バス「尚絅学院大前」行き)

② JR仙台駅から地下鉄・バス利用の場合

地下鉄南北線で約8分、長町南駅下車(富沢駅方面行き)後、バスプール2番からバスで約35分(宮城交通バス「尚絅学院大前」行き)

③ JR南仙台駅よりバス利用の場合

南仙台駅(西口バスプール)からバスで約15分(宮城交通バス「尚絅学院大前」行き)

④ 仙台空港より仙台アクセス線利用の場合

仙台空港駅より約20分、南仙台駅下車(仙台駅方面行き)後、南仙台駅(西口)からバスで約15分(宮城交通バス「尚絅学院大前」行き)

※日曜日はバスの本数が少なくなります。

6. 宿泊・懇親会場

JR仙台駅周辺にホテルは多数あります。各自でご予約下さいますようお願いいたします。

懇親会場の江陽グランドホテルは、地下鉄南北線仙台駅から1つ目の広瀬通駅すぐそばです。仙台駅から徒歩で約10分。

7. 連絡先

服飾文化学会 第13回総会・大会実行委員会

〒981-1295 宮城県名取市ゆりが丘4-10-1

Tel.&Fax: 022-381-3358 (玉田研究室)

尚絅学院大学 生活環境学科

担当: 玉田 真紀 (tamada@shokei.ac.jp)

8. その他

① 大学内が土足厳禁のためスリッパをご用意します。スリッパでない方がよろしい方は、上履きをご持参下さいますようお願いいたします。

② 展示作品の撮影: カメラマンによる撮影を1作品につき1点、展示終了後に行います。

博士論文「能装束小袖物の形状変遷に関する研究」とその後の研究活動

田中 淑江

研究対象である能装束小袖物と私との関りは約20年間に亘る。私が染織品の修復として、最初に携わったのが桃山時代の能装束であった。その後、修復は私の研究活動の一部となり、数々の能装束に携わってきた。その際問題点が浮かんできたが、それは近世の小袖に関する基礎データは先行研究によりすでに存在し、修復の際の仕立てで活用できるが、能装束の形状に関する基礎データは、ほとんど無い状況であった。そこで能装束小袖物の時代ごとにみられる形状の特徴を明らかにし、それを修復に役立てたいという考えから、この研究に取り組んだのである。

博士論文は、日本女子大学生活環境学研究科で、小笠原小枝教授の御指導を賜った。従来の能装束の研究は「意匠論」「染織技術論」が中心であった。本研究では、装束を仕立てるという被服学の最も基本的な視点から「形状論」を展開したのである。研究方法は桃山時代から現代までの実物作品を、仕立てに必要な16箇所を採寸調査（249領）し、文献、絵画資料、修復事例より多面的に能装束の形状の検討を行った。その結果、能装束は時代を経て「変化する寸法」と「変化しない寸法」から構成されていることを見出した。また調査した能装束の個々の寸法には統一性がなく異なるが、全体を比率で捉えると、各時代の形状の特徴を顕著に示すことを導き出した。また従来、能装束の形状に関しては、桃山時代から江戸時代初期にかけての袖幅の変化のみの言及であった。しかし本研究では、幕末から明治にかけて、能装束に第2の変化の時期が存在し、それは身幅や身丈に変化が生じることを明確にした。その要因は、江戸時代後期に生じた着装の変化であることを明らかにした。以上の結果と基礎データは今後、能装束の修復での活用や、博物館、美術館での作品の鑑識において、充分活用し得るものとして評価された。博士論文取得後は、染織品保存修復活動、学術研究、教育現場に携わっている。

まず染織品保存修復活動では、博士論文に関連する大倉集古館所蔵「白地銀堅縞に萩蜘蛛の巣模

様縫箔」「鬱金地夕顔模様縫箔」ほか1領の能装束の修復に携わった。一方、学習院史料館蔵「高松宮妃ビーズドレス」や根津美術館蔵「上代裂」などの修復も行った。修復作品は時代、形状、材質が多種多様であるが、それぞれの作品の特徴をよく理解し、真摯な気持ちで向き合い、最善の方法を選択しながら修復に取り組むことが肝要である。

次に学術研究では、修復に携わった作品の新知見を、服装史や染織技術史などと検証し拙稿にまとめることや、または学会発表などを行った（「高松宮妃喜久子所用ビーズドレス」の修復報告及び一考察『学習院大学史料館紀要』第17号、2011、「白地石畳に将棋模様小袖の考察-修復過程で得た知見をもとに-」独立行政法人東京国立博物館、『MUSEUM』No.630、2011、第35回文化財保存修復学会「狭山北条家伝来 緋羅紗地三鱗紋陣羽織の復元模造製作」のパネル発表）。修復で得た知見を服飾研究者と共有することで、作品に新たな価値を見出すことが出来ると考える。また能装束の研究も継続しており、国立能楽堂調査研究Vol.6（2012年3月発行予定）に『能装束の着装の変化に関する一私見 - 小袖物能装束の寸法の変化から -』を投稿している。そこでは、博士論文以後新たに調査した年紀が明らかな作品、絵画、文献資料に基づき、更に能装束の着装変化を掘り下げたものである。

最後に教育現場では、平面造形（和裁）の授業を長年非常勤として担当してきたが、この4月からは共立女子大学の専任教員として就任する。昨今、和服離れといわれているが、学生の中には着物を作り着装することに強く興味をもっている人がかなり存在する。今後、平面造形（和裁）では着物を作ること、着装することに興味を持たせると同時に、近世の小袖や能装束の構成と服装史との相互関係、また染織品の修復と和裁技術との関連性など、多面的に学べる分野へと展開したいと考えている。

2011（平成23）年度 研究例会の報告

平成23年度研究例会は11月26日、東京都板橋区の東京家政大学で開催された。同大学博物館にて開催中の「グアテマラの民族衣装 いろ もよう かたちの発見」展見学に引き続き、2名の新進の研究家による研究発表が行われた。出席は学会員26名、非学会員4名。発表内容は次の通りです。

（研究例会担当 能澤慧子）

社会表象としての服飾 ―近代フランスにおける異性装の研究―

新實 五穂（実践女子大学非常勤講師）

19世紀前半のフランスでは、1800年11月7日の警察令によって女性の異性装は厳しく禁じられ、女性がズボン型のペチコートを着用する行為は「男性・半男性的」なものと見なされた。このような状況下で、男装をした女性作家ジョルジュ・サンドと、ズボン型のペチコートを身につけ、女性運動を牽引したサン＝シモン主義の女性たちを事例として、彼女たちの服装が、結婚制度や家族制度が内包する女性性にまつわる問題を視覚的に訴える装置であったことを明らかにした。



男装の麗人として有名なジョルジュ・サンドは、パリに住んだ20代後半から30代にかけて、経済的・機能的な理由に加え、職業作家として生きていくため、男性服を着用したことが知られている。た

だし、1835年5月20日に、サンドは男装して貴族院を訪れ、そこで開廷された巨大裁判を傍聴している。巨大裁判とは、フランス各地で続発した暴動で逮捕された労働者や反体制派の指導者などを一斉に裁いた政治裁判である。当時、妻は自由に裁判上の行為を行えないばかりか、被告人が夫であろうと、政治・重罪裁判の法廷には出席できないという社会的な制約があった。19世紀の政治・

重罪裁判では、激しやすいヒステリックな性質などを理由に、女性は厳重に排除されていた。サンドも例外ではなく、19世紀の女性たちは必要に迫られて男装を強いられたのであり、男装は社会的な制約へのある種受動的な反応であると言える。またサンドが執筆した作品には、異性装をする女性が少なからず登場する。たとえば、対話劇『ガブリエル』における女主人公の異性装は、夫に束縛される悲惨な生活や一族の長による抑圧から逃れる手段として使用され、結婚や家族という枠組みに由来する女性の隷属状態を告発する役割を担っている。さらに異性装を通して新たな性が表象され、男性同等の教育知を備え、女性の性別役割や身体規範を拒否する「女性以上の存在」が示されている。

一方、女性サン＝シモン主義者が着用したズボン型のペチコートは、サン＝シモン主義における女性解放の思想を象徴している。産業主義や有能者支配と称される、サン＝シモン主義という社会思想にあって、女性の解放とは、男女の対等な関係が家族の中で培われることを原則とし、ナポレオン法典に対抗して、家父長的な家族制度の廃止を標榜するものであった。1830年代初めに、サン＝シモン主義者たちは、思想の旗印として制服制度を確立している。女性の恰好はズボン型のペチコート・青い簡素な膝丈のドレス・赤または白の襟巻き・赤い大きな帽子・ベルトからなり、裁縫仕事の放棄が着用要件であった。元来、ズボンには、男性の権威や家長の権利を象徴する歴史が存在し、

ズボンを穿く者、すなわち家庭を治める権利を掌握した者は、糸紡ぎなどしないという社会的な意識が存続していた。女性サン＝シモン主義者がズボン型のペチコートを着用した目的は、夫が無能ならば、妻が有能さを示し、家庭を治めるべきことや、女性にも男性同様に家庭を治める権利が存在することを示すためであった。夫婦間での男女

平等を基本にする女性解放思想を普及する際、サン＝シモン主義者たちは、その思想を女性がズボン型のペチコートを身に着けるという具体的な行為に変換していた。ズボン型のペチコートは、思想普及の手段として何より相応しい服飾であったのである。

「近世初期における小袖意匠の系譜」 ―小袖意匠形式の成立と展開およびその位置づけ―

小出(末久)真理子 (目白大学短期大学部非常勤講師)

小袖は室町時代の中頃より表着として着用されるようになり、男女を問わない一般的な衣服として着用されるようになった。平面的衣装構成の形態をもつ小袖の装飾表現の主体は、そこに描かれてい



る文様や文様を含む意匠の配置といえ、江戸時代前期以降より時代を反映した小袖意匠が現れ次第に固定化されてくると捉えられる。ここで慶長期から寛文期頃にかけての遺品を概観すると、慶長小袖と呼称される小袖遺品群のほかに、それとは異なる様相を示す小袖意匠を見出すことができ、当該期頃は多様な意匠形式が存在する近世小袖意匠の萌芽的形成期ではないかと推察された。

そこで本発表では、近世初期に発生した慶長小袖から寛文小袖に至る間の小袖意匠の成立、発展の過程を、主に意匠形式の変遷という側面から論じるとともに、その意匠形式の成立過程の背景にある要因についても言及を行った。その際に、当時の時世粧を表現したとされる近世初期風俗画を用い、数少ない遺品を補いながら小袖意匠についての解明を行うことを目的とした。

まず、近世初期風俗画39作例を選出し、そこに描かれた意匠構成の特徴を大まかに分類した。その際に、風俗画の画風などによる小袖意匠に対する影響を考慮して、ジャンル別に小袖意匠の特徴を論じた。その結果、ジャンルを超えた小袖意匠が存在し、作例間におけるその類似性は主に年代別に関与していることを指摘した。同時に、風俗画に描かれた小袖意匠が実際に則した意匠表現であったのかという問題を検討するために、小袖遺品などとの照合に努めた。その結果、風俗画から見出した小袖意匠の特徴は現存する小袖遺品と一致し、その実写性を確認できた。以上の検討から、当該期における6つの小袖意匠形式を見出し、これらを時系列にして各意匠形式についての検討を行った。これらを概観すると、第1に、区画に収められた文様が現れて強調されるようになること、第2に、それぞれ6つの意匠形式がその前後の時代の小袖様式と連繫していること、第3に、同時期に発生した複数の小袖意匠形式は相互に、それら意匠形式が持つ要素の一部を交換、あるいは転用して成立していることを指摘することできた。

加えて、小袖意匠の実写性を論じた際、比較対照とした小袖遺品の中に武家服飾を複数見出すことができたため、近世初期の小袖意匠の起源と成立について検討するために、小袖意匠と武家服飾の連繫について検討を行った。結果、近世初期小袖意匠と武家服飾意匠との共通性が認められ、武

家服飾が小袖意匠の成立に影響を与えていること指摘することができた。

室町時代後期から江戸時代初期頃に武家たちが台頭し始めて社会的な実権を握っていく背景の中で新しい意識や創意工夫が誕生した。近世初期は、試行錯誤の末に小袖意匠の多重構造が作られた形成期にあたると考えられる。そして江戸時代に入っ

て幕藩体制が確立し、市場にも広がりをもせる頃には、市井の町人たちは質的にも量的にも身近な存在として小袖を享受するようになり、ある一定の特徴的意匠として固定化された寛文小袖様式が誕生して、近世前期における小袖意匠の様式的完成期を迎えていくことになる位置づけられた。

2011（平成23）年度 論文発表会の報告

本年度の論文発表会は2012年3月6日(火)午後1時30分より、お茶の水女子大学本館306室において開催された。参加は106名で盛会となった。卒業論文発表は8件、修士論文発表は3件の計11件の発表。そのうち1件は実物製作を伴う発表であった。

<プログラム>

卒業論文

座長 大網美代子（大妻女子大学）

1. 表象的視点から見たスーツの変遷と生産性の追求
石川優希（文化学園大学）

座長 徳井淑子（お茶の水女子大学）

2. 源氏物語絵巻と紫式部日記絵巻に見られる服飾表現－物語・詞書・絵画の比較を通して－
白土亜枝（共立女子大学）

3. 衣服におけるシンボリズム
－日本とヨーロッパの文化比較から－
山崎千弘（共立女子大学）

座長 高野倉睦子（神戸女子大学）

4. バレンシアガ研究
秋山えり子（杉野服飾大学）

座長 長崎 巖（共立女子大学）

5. 仏教の東方伝播に伴う天衣イメージの変遷－インドでの発生から日本での領巾への影響まで－
徳江由美子（日本女子大学）

座長 齊藤昌子（共立女子大学）

6. 青森のぼろ文化－襦袢からBOROまで－
武井 海（文化学園大学）

座長 荻原延元（川村学園大学）

7. パシュトゥン族の民族衣装からのデザイン発想－実物製作－
井上美和子（文化学園大学）

座長 長田美智子（鎌倉女子大学）

8. 子供服に関する安全基準と実態調査～Save Children～
越地真紀子、関井恵美（実践女子大学）

修士論文

座長 塚田耕一（杉野服飾大学）

9. 少女雑誌に見る「少女らしい」装いの意味－1900年代初頭から1940年頃までの『少女の友』を中心に
鳥山寛恵（東京家政大学大学院）

座長 高部啓子（実践女子大学）

10. 染織品に使用される絹布、修復用絹布の剛軟性とそれらの適合性に関する研究
北島恭代（共立女子大学大学院）

座長 能澤慧子（東京家政大学）

11. The Lady's Realm に見る19世紀イギリスの女性と服飾
坂田恭子（日本女子大学大学院）

石川論文は男性スーツの歴史と表象的視点から見たビジネススーツの役割について調査し、ビジネススーツを例にとり、現代社会に至るまでのファッションという事象がどのような役割を果たし、生産性と関連して社会に根付いた過程を考察した研



論文発表会会場

究発表である。スーツはあらゆるシーンで多く着られるため完成度の高いアイテムで技術的側面からも生産性が高い。ジェントルマンシップ等の論理は、1900年代のビジネススーツにおける「個の消去」の先駆と考察する。

白土論文は源氏物語絵巻、紫式部日記絵巻の2つの絵巻に見られる服飾表現の研究である。源氏物語絵巻に描かれる菱装束は、平安時代の貴族の美意識を反映して描かれ、紫式部日記絵巻に描かれる強装束は、鎌倉時代の貴族の美意識を反映し描かれたものであると論じた。

山崎論文は衣服におけるシンボリズムとして色と文様に込められた意味と日本の家紋、ヨーロッパの紋章について取り上げた。ヨーロッパの紋章は「個の倫理」を重んじる文化であるために、1人がひとつの紋章を持ち、他の者は兄弟であっても同じ紋章を用いることはできないという、「個」のシンボリズムとして働いたことを明らかにしている。

秋山論文はバレンシアガの衣服の特徴は、構築的で、幾何学的な形態にあり、軽く、動きやすい。

その理由は身体と衣服の間の空間を考えることで明らかになる。バレンシアガの衣服は決して流行に流されるものではなかった。人々の本当に欲

するものに答え時代に忠実に作られた。

徳江論文は天衣イメージを文化的背景から探り、イメージ形成過程とその後のインド中国での展開、特に日本における古代服飾一天衣と同形状の衣服である領巾(ひれ)への影響を明らかにした。仏教伝来以降は、『万葉集』では遠く離れた恋人に向けて自己の魂を送るために振る、『令集解』でも鎮魂の際の呪具として振ることで魂を身体に留めるとの記述があり、自己の魂・死者の魂を送る効果

に変化していると考察。

武井論文は「ぼろ」に注目した研究発表である。海外では「ぼろ」は「BORO」と呼ばれ、青森の「ぼろ」にみられる特徴とその要因について調査を行なった。とくに布を大切に長く利用する文化が人と布との密接な関係、独自の「ぼろ」文化を生み出したのであると結論づけた。

井上論文はアフガニスタンのパシュトゥン遊牧民の民族衣装の特徴について研究した。パシュトゥン族の民族衣装46体を抽出し、布地の色、刺繍の色、刺繍の文様、装飾品、付属品、ビーズの色の6項目の分析を行ない、テラードジャケットとプリーツスカートのツーピース1体を実物製作した。その民族衣装の特徴を活かした仕上がりの見事な作品になった。

越地・関井論文は最近の子ども服はおしゃれなものが多くあるが、身の危険性をまだ把握できない遊び盛りの子どもにとって危険性もあると推測し、市場に売られている子ども服や、着用中の子ども服を調べ、安全性の実態を明らかにすることを目的とした。規格制定のためにも、事故情報の報告や意見、質問等を受け入れる態勢が整っている機関やWebサイトを積極的に消費者に発信し、使用しやすい環境を作るべきであると提案がなさ

れた。

鳥山論文は「少女」像は1908年～1910年代の幼さを残した「少女」像、1920年頃～1930年代初頭の大人びた「少女」像、1935年～1940年の「清純な」「少女」像へ、大きく3度変化してきたとし、「少女らしい」和装においては、具体的に肩揚げ、長い袂、三尺帯の3点が明言され「子ども」の印象を与えることが求められた。「大人」になりたくないという願いを反映していると結論づけた。

北島論文は染織文化財の修復の際に最も重要な修復布の選択、被修復布と修復布の適合性について、客観的なデータを得ることを目的とした。江戸時代の平織布を被修復布とし、剛軟度の異なる4種の修復布を用いて被修復布と修復布の適合性について2つの状態で評価実験を行い（評価者16名）、江戸時代の小袖裂は、明治時代以降の着物裂に比べ、薄地で軽く軟らかい傾向にあることがわかった。裏打ちに用いる修復布には、剛軟度の近い布が選択されることが明らかになった。

坂田論文は19世紀末のイギリスにおいて社会進出した女性が、どのような美意識を持って衣生活を営んでいたのかを当時の女性雑誌を用いて明らかにする。The Lady's Realm誌の結婚観、職業観、服飾観から検証した結果、当時のイギリス女性が、結婚や職業の如何を問わず、「レディーとして美しく装う」ということに重きを置いていたと述べた。

各発表において質疑応答は活発に行われ座長の講評もあった。研究テーマも多岐にわたり参加者は熱心に聴き入っていた。懇親会は立食パーティで多くの出席者があり、美味しいご馳走とともに発表者と教員、参加者との楽しい交流会となった。
(論文発表会担当 荻原延元)

夏期セミナーのお知らせ

2012年度の夏期セミナーは、8月2週目に佐賀県において、更紗・鍋島焼・佐賀錦ほかの研修を計画しています。

*****事務局より*****

●会費納入のお願い

今号に2012年度 服飾文化学会会費（正会員 6千円、学生会員 3千円）の払込用紙を同封しました。5月末日までに払込みをお願い致します。過年度未納の方も、ご確認の上払込をよろしくお願い致します。

●会員の異動（敬称略・五十音順）

★入会者（2011年9月21日～2012年2月29日）

正会員

伊 東 由美子（文化学園大学）
榎 本 千津子
大 橋 寛 子（文化学園大学）
小 橋 宏 美（文化学園大学）
砂長谷 由 香（文化学園大学）
千 葉 悦 子（文化学園大学）
寺 嶋 朋 子（文化学園大学）
永 富 彰 子（文化学園大学）
韓 先 林（大阪産業大学非常勤）
丸 茂 佐智子（鎌倉女子大学）
山 口 直 子（和洋女子大学）
吉 野 真由子（文化学園大学）

学生会員

内 田 彩 子（和洋女子大学大学院）
奥 野 良 江（東京家政大学大学院）
高 橋 広 子（武蔵野美術大学）
中 井 真 木（東京大学大学院）

会報 No.23：2012(平成24)年3月30日発行
編集発行人：服飾文化学会

事務局：112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学 人間生活学科 徳井研究室

TEL,FAX;03-5978-5802

E-mail;tokui.yoshiko@ocha.ac.jp

URL;http://www.fukushoku-bunka-gakkai.jp